

# 町独自の学力調査を基に 授業改善のPDCAサイクルを 回し、確かな学力を育む

静岡県吉田町では、2013年度の文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果の低迷を受け、確かな学力を育むことを目標に掲げた「吉田町ラーニングプラン」を策定した。小・中学校、幼稚園・保育園、教育委員会、家庭、社会教育の役割を明確にし、それを果たすための施策を打ち立てている。町独自の学力調査も開始し、その分析結果を基に各校が授業改善を図ったところ、児童・生徒の学力が徐々に上向いている。

- ◎静岡県中部に位置し、シラス漁やウナギの養殖などが盛んな町。豊富な水資源を生かし、企業誘致にも成功している。1889（明治22）年に吉田村となり、1949（昭和24）年に吉田町に改称。120年あまり合併をせずに現在に至る。
- ◎人口…約3万人 ◎面積…20.73km<sup>2</sup>
- ◎町立学校数…小学校3校、中学校1校 ◎児童生徒数…2,586人
- ◎電話…0548-33-2151（学校教育課）
- ◎URL…<http://www.town.yoshida.shizuoka.jp/2110.htm>

## 静岡県吉田町 プロフィール

## 教育長の 戦略

## 調査結果から課題意識を共有し、 町全体で学力向上に取り組む

静岡県吉田町教育委員会 教育長 **浅井啓言**

### 学力向上に向けて、 果たすべき役割を明確化

吉田町は、幼稚園・保育園が6園、小学校が3校、中学校が1校という町です。そうした本町が本格的に教育改革を始めたのは、2013年度のことでした。その年の文部科学省「全国学力・学習状況調査」で、静岡県は小学校国語Aの平均正答率が全国最下位であることが明らかになり、静岡県教育委員会から早急な原因分析と授業改善が求められたのです。町でもこの結果を真摯に受け止め、同年秋に「吉田町児童生徒学力向上委員会」を発足させました。小・中学校、幼稚園・保育園、教育委員会、保護者、有識者などがメンバーとなり、それぞれの立場で果たすべき役割に

ついて話し合ったのです。

その内容は、子どもが確かな学力を身につけるための提言として、①学校での授業改善・教員の意識改革、②家庭学習の習慣化、③基本的な生活習慣の定着、④教育委員会による学校への指導と家庭への支援の4つの柱にまとめました。そして、それらの具現策として、2014年度から4か年計画の「吉田町ラーニングプラン（以下、YLP）」を策定したのです。

YLPでは、子どもの成長にかかわる小・中学校、幼稚園・保育園、教育委員会、保護者、社会教育が担う役割を明確にし、それらを果たすためにはどうすればよいかを考えました。町にとっては初めての取り組みになるため、静岡大学教育学部の協力を得ながら、一つひとつの施策に

反映させていきました（図1）。

### 町独自の学力調査を生かし、 PDCAサイクルを回す体制を構築

YLPの最終到達目標には、「2017年度の『全国学力・学習状況調査』において、小・中学校の国語・算数（数学）の平均正答率が全国平均以上」を掲げました。その達成に向けて最も力を入れているのが、授業力の向上です。2014年度に町独自の学力調査を導入し、町教委と各校とでその分析結果を軸に授業改善のPDCAサイクルを回しています。

吉田町学力調査にはベネッセの「総合学力調査」を採用しました。毎年4月と11月に調査を実施し、結果を町教委とベネッセとで分析し、各校に伝えています。各校はそれを基に



あさい・ひろゆき 静岡県内の公立中学校教諭、吉田町立自彊小学校校長、牧之原市立相良中学校校長、吉田町立吉田中学校校長を経て、2013年度に吉田町教育委員会教育長に就任。2016年4月から新教育委員会制度による任命を受けて、現職となる。

対策を練り、授業案などに落とし込みます。そして、次の吉田町学力調査で教育の成果を測り、さらなる授業改善につなげています。

分析結果は町教委主催の公設学習塾にも生かしています。本年度は、公設学習塾の運営をベネッセと提携し、弱点補強の復習プリントを準備し、定着を図っています。

また、保護者向けの講演会や面談では、吉田町学力調査の結果から見えた家庭学習の重要性などを伝えています。

吉田町学力調査の結果を施策に確実に反映させるために、各校の校長と町教委から成る「YLP実施委員会」と、各校の主にミドルリーダーであるYLP担当者と町教委から成る「YLP担当者会議」を、それぞれ月1回開催しています。私は教育長として、会議に参加するすべてのメンバーが「吉田町の教育を担う」という意識を持ち、施策に対して責任を持って遂行できるよう働きかけることを心が

けています。

また、YLPを効果的かつ効率的に進めていくために、町教委の指導主事を増員し、行政職員と指導主事がペアで各施策を担当できるよう、体制を見直しました。指導主事は学校の課題や教員の悩みに寄り添うことができる一方、行政職員はそれを客観的な視点で捉え、施策に落とし込むことに長けています。両者がともに施策を進めることで、課題把握から施策実施までの確に行えるようになりました。

### 幼保小中の接続と個への支援がさらなる学力向上の鍵

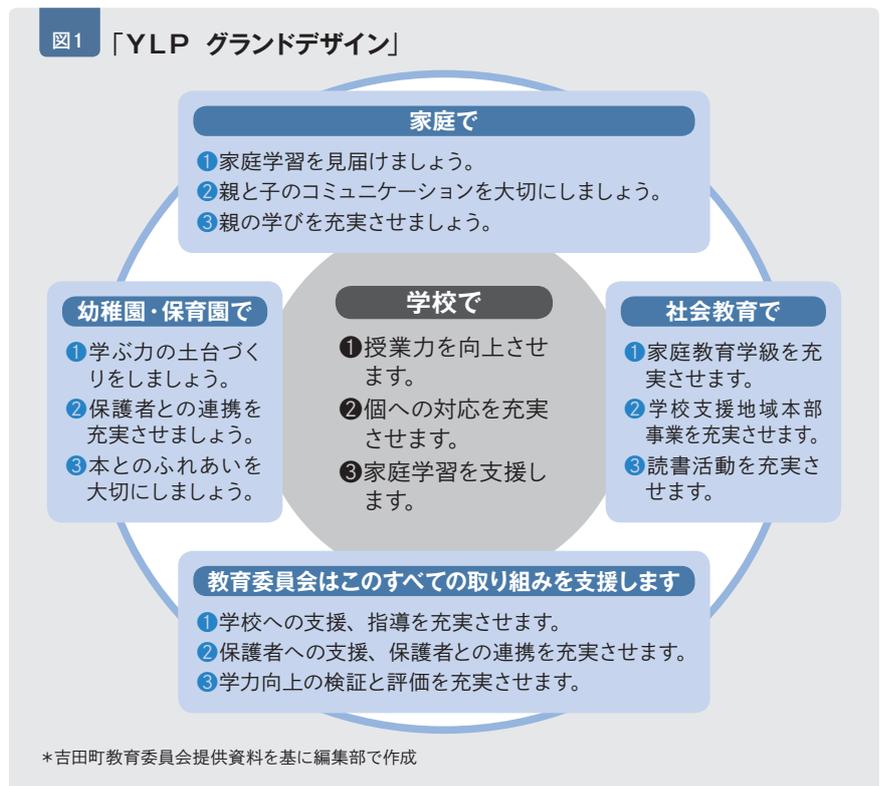
YLPの中間到達目標には、「2013年度と2015年度の『全国学力・学習状況調査』の小・中学校の国語・算数（数学）の全国平均正答率と町平均正答率の差が半減」を掲げていました。小学校では目標を達成しましたが、中学校では達成に至りませんでした。中学校段階で基礎学力がついていないということは、もっと前

の段階でつまづいているはずで、決して中学校だけの課題ではありません。今後は、幼稚園・保育園から中学校までを段差なく接続させ、すべての学校種が一体となって基礎学力の向上に努めていける体制を築いていきたいと考えています。

また、吉田町はコンパクトな町であるため、その利点を生かし、子ども一人ひとりを丁寧に見取る指導が可能です。吉田町学力調査の結果を活用した補充学習の実施や面談の充実など、子どもの学びをあらゆる側面から支えていきたいと思っています。

吉田町学力調査の分析結果を各施策に反映させ、PDCAサイクルを回していることは、我が町の大きな強みです。調査によって学力が目に見えて分かることで、学校、教育委員会、保護者の三者が共通の課題意識と目的意識を持てるようになっていきました。子どもを取り巻くすべての機関が同じ方向を向き、学校内外の学習を支援することで、確かな学力の育成に近づいていけると考えています。

図1 「YLP グランドデザイン」





## 教育委員会の 施策

# 教委と学校の連携体制を構築し、 調査結果を確実に生かす

## 吉田町教育委員会

### 2つの会議で調査結果と 各校の施策を共有する

吉田町では、「吉田町ラーニングプラン（以下、YLP）」の軸となる取り組みとして、2014年度から町独自の学力調査にベネッセの「総合学力調査」を導入し、毎年4月と11月に調査を実施している。対象学年は、4月は小学2～5年生と中学1・2年生、11月は小・中学校の全学年で、教科は、国語、算数・数学、理科（小学4年生～中学3年生のみ）、及び学習意識調査である。

実施後には、全国平均と比較した町・学校・学年・学級の傾向と、観点・領域・単元・設問別の分析結果が、ベネッセから報告される。それらの内容を、町教委は「YLP実施委員会」と「YLP担当者会議」の合同会議で説明。各校はそれを持ち帰り、YLP担当者を中心に改めて自校の結果を分析し、課題を洗い出して、対策を検討する。学校教育課の杉本裕子指導主事は、データに基づいて授業

改善を進めた結果、教員の意識が大きく変化してきたと語る。

「子どもにつけたい力は学習指導要領に示されていますが、吉田町学力調査導入以前の学校現場では、目の前の子どもにはどのような力が足りないのか、足りない力をつける手立ては何かを、明確化できていませんでした。吉田町学力調査による現状の学力分析と、その結果への対策を考えることで、指導方針が具体化し、授業の改善も進んだのです」

「YLP実施委員会」と「YLP担当者会議」は、各校の取り組みに重要な役割を果たす。まず、「実施委員会」で町全体の傾向を基に、町の教育施策を協議する。そして、各校長が自校の分析結果と対策について報告し合い、各校の取り組みの全体像を共有する。一方、「YLP担当者会議」では、現場の教員が吉田町学力調査の結果をどのように受け止めたのかを報告し、校内研修への反映の仕方や授業への落とし込み方など、学年・学級の現場レベルの対策について発表し合い、共有する。特に、「YLP担当者会議」は、学校間の横のつながりを生む効果も大きいと、杉本指導主事は語る。

「YLP担当者1人で学校を動かすことはできません。『YLP担当者会議』は、『YLPの取り組みを自校の教員に理解してもらうために、こんな方法が有効だった』『こう伝えたら、多くの教員が動いてくれた』といった情報交換の場になっています。担当者が意欲的になり、学校全体の取り組みへと高めていくヒントを得る場になっていると感じています」

学習意識調査の分析結果も活用する。学校教育課の松永満課長補佐は、その意義についてこう語る。

「学力向上の鍵を握る家庭学習の習慣は、保護者の協力がなくては定着しません。小学生の『ゲームの時間が少ない児童は、正答率が高い傾向にある』といったことや、中学生の『学校の宿題をしている生徒や学校の規則を守っている生徒は、正答率が高い傾向にある』といった、生活習慣・家庭学習習慣と学力に相関性があることを、調査結果を基に数値で示すことで、保護者からの理解や協力も得られやすくなっています」

### 公設学習塾を運営し、 個々の学力向上を図る

吉田町学力調査が施策の改善に活用されている例を見てみよう。

町教委は、補充学習の充実に力を入れ、月1回、吉田町立吉田中学校で公設学習塾を開いている。目的は、「吉田町学力調査の分析結果を踏まえた適切な教材を提供し、児童・生徒の基礎学力定着を図る」ことと、「主体的な学習の仕方を身につけさせることで学習意欲を引き出し、自ら解決する力を育む」ことだ。対象は、小学1～6年生の算数と、中学1～3年生の数学・英語で、希望者は無料で参加できる。個別指導とするため、児童・生徒2～5人に対して1人の学習指導員を配置。学習指導員は、教員、教員OB、教員志望の大学生、非常勤講師などが務める。

公設学習塾の前身は土曜学習会だったが、当時は、児童・生徒が自



学校教育課課長補佐

**松永 満**

まつなが・みつる

1991年度に吉田町に入庁。2015年度に教育委員会に出向し、現職。



学校教育課指導主事

**杉本 裕子**

すぎもと・ひろこ

2015年度は吉田町立住吉小学校にて研修主任とYLP担当を兼務。2016年度から現職。

分のしたい勉強をする場として、宿題などを持ち込んでいた。しかし、吉田町学力調査の結果を踏まえ、より効果的に学力を身につけさせたいとの考えから、子どもの弱点に応じた学習支援をする場に転換。吉田町学力調査の結果に基づいた弱点補強のプリントを用意し、授業外でも弱点克服にアプローチできるものとした。

学年によっては、プリントの冒頭から基礎・基本問題を省いて、活用問題に取り組みせる場合もある。これは、「活用問題に弱い」という吉田町の傾向に対応するための。公設学習塾は月1回と頻度が限られているからこそ、吉田町学力調査の結果を活用して、重点を絞った形で子どもたちの力を育成することが重要だと考えている。

## 「家庭学習の手引き」で学校と家庭を結びつける

YLPでは、家庭の役割も明確にし

ており、その具体策として「家庭学習の手引き」(図2)を作成し、各家庭に配布した。これを各家庭で確実に活用してもらえよう、YLP担当者が担任に意義を周知。それを基にして、学級懇談会や個別面談で担任から保護者に説明や活用方法の確認を行っている。

また、「家庭学習の手引き」には、小学1～3年生用、4～6年生用、中学1～3年生用があるが、そのいずれも最初のページに、小学1年生～中学3年生までの家庭学習の時間の目安や内容例が示されている。保護者に小・中学校9年間の家庭学習をイメージしてもらい、発達段階に合わせて自学自習の姿勢を育む必要があることへの理解を促すためである。

さらに、子どもに自分で学習目標を定めさせることを重視し、手引きには「自分で決めた家庭学習のめあて」を書く欄を設けた。

「自分で学習目標を立てられることは、自立した学習者への一歩となります。子どもが立てた目標を担当が確認し、適切かどうかを指導するようにしています」(杉本指導主事)

「家庭学習の手引き」は、定期的に担任に提出。自分が立てた目標の通りに進んでいるかを担任が確認し、達成できたら次の目標設定をする。子どもが自身の学習に対して、PDC Aサイクルを回せるような素地を築くための工夫をしているのだ。

2016年度には、「家庭学習の手引き」を改善し、小学校では「本読みカード」、中学校では「生活学習ノート」に統合して運用するようにした。毎日の提出物を効率化するため、「YLP担当者会議」での発案による改善だ。そのように、「YLP担当者会議」は、町教委が立案したプランに対して学校現場の声を反映する場にもなっている。

## 町教委の役割は教員の意欲を引き出すこと

2015年度の間中到達目標には、小学校は到達したものの、中学校はいま一歩届かなかった。学力向上のためには町教委の働きが欠かせないと、杉本指導主事は言う。

「現場の先生方の意欲を高めていくことも、教育委員会の大切な仕事です。町全体で子どもを育てるという意識で、小・中学校、幼稚園・保育園の先生方とともに、つながりのある教育を進めていかなければならないと考えています」

町教委が積極的に学校現場にかかわることが、取り組みへの理解を促す鍵になると、松永課長補佐は考えている。

「子どもたちには、吉田町で受けた教育に誇りを持ってほしいと思います。そのために、私たちは学校現場へ足繁く通い、現場の先生方と足並みをそろえていきたいと思っています」

図2 「家庭学習の手引き」(小学4～6年生用)

**家庭学習の手引き (小学校高学年)**

めあて・目標	対象	取組
<input type="checkbox"/> 宿願をやりとげる <input type="checkbox"/> 学習習慣をつける  <input type="checkbox"/> 苦手をなくす <input type="checkbox"/> 苦手を作らない <input type="checkbox"/> 学習を楽しむ	<input type="checkbox"/> 宿題  <input type="checkbox"/> 復習 <input type="checkbox"/> 予習 <input type="checkbox"/> 自主学習	<input type="checkbox"/> 家に帰ったら今日の宿題を確認しよう <input type="checkbox"/> 何時に宿題を始めるか決めよう <input type="checkbox"/> 決めた時刻に学習を始めよう <input type="checkbox"/> 学習をするときには、テレビを消そう <input type="checkbox"/> 話をしないで学習に集中しよう  <input type="checkbox"/> 学年×10分(小学校高学年) <input type="checkbox"/> 今日習ったことを見直そう <input type="checkbox"/> 明日の授業で「わからないこと」を確認しよう <input type="checkbox"/> 学習の仕方を先生に相談しよう <input type="checkbox"/> 「自由課題」に取り組もう

自分で決めた 家庭学習の めあて

月日	曜日	めあてが守れたら ○	月日	曜日	めあてが守れたら ○

\*吉田町教育委員会提供資料をそのまま掲載



## 学校現場の 実践

# 学年間の系統性を踏まえて、 調査結果を基に授業を改善

## 吉田町立住吉小学校



◎ 1901 (明治 34) 年、住吉尋常小学校として創立。学校目標に「豊かな心 学ぶ力」を掲げ、自尊感情を育む指導や、学力・学習意欲を高める取り組みに力を入れる。

校長 鈴木寿夫先生

児童数 524 人

学級数 20 学級 (うち特別支援学級 2)

電話 0548-32-1476

URL <http://www.e-schoolnet.jp/sumiyoshi/>

### きめ細かな分析で、 強化すべき部分を見極める

吉田町立住吉小学校では、「児童の学力を高める授業改善」を教育課題の1つに挙げ、吉田町学力調査を活用して授業改善のPDCAサイクルを回している。以前は、「授業を一生懸命やっていれば、子どもたちには力がつく」という考えが教員間にあった。しかし、文部科学省「全国学力・学習状況調査」で、同校の平均正答率が全国平均を下回ったことで、子どもに基礎・基本が定着していないことが明らかになり、教員の意識が変化し始めた。鈴木寿夫校長は次のように語る。

「テストの点数が学力のすべてではありませんが、一生懸命授業をしても、調査結果が向上しなければ、それは身につけさせたい力を育む授業ができていなかったということです。吉田町学力調査は、現状を正確に把握し、それを基に授業改善をするという意識へと、教員集団を引き上げる効果がありました」

吉田町学力調査の結果を受け取ると、YLP担当者を中心に全教員で分析し、対策を話し合う。特に誤答が

多かった内容については、学力層別集計データを分析して、各学年集団の弱い内容や適する学習形態を見極め、今後の授業改善に生かす。YLP担当の北西<sup>いづみ</sup>泉美先生はこう説明する。

「分析結果から、どのような授業にするのかまで、具体化して話し合っています。例えば、重点を置く単元を決め、どの単元を習熟度別授業にするのか、どの授業をチーム・ティーチングにするのかなどを検討しています」(北西先生)

教員全員が年1回の研究授業を行うが、その際にも調査結果で見いだした強化すべき部分を反映した内容にしている。

### 授業の組み立ては 学年間のつながりを考慮

同校が1年生の算数で行った授業改善を具体的に見ていこう。

2015年4月に行われた吉田町学力調査で、2年生の算数では、「数学的な考え方」の観点と「式による表現」の単元の正答率が、町の平均よりも低かった。また、同校が実施したアンケートやレディネステスト\*の結果から、1年生2学期の時点で既に算数に苦手意識を持つ児童が40%

もおり、問題を解決できた達成感を持たせ、苦手意識を払拭する必要があることが分かった。同時に、子ども同士の考えの交流が学習意欲の向上により影響があることも明らかになった。そこで、1年生のうちから手を打つことが大切として、『たすのかな ひくのかな』の単元で、ブロックなどの具体物を使って、ペアで考えを説明し合う活動を授業に取り入れることにした。

授業は、吉田町学力調査の結果を基にして組み立てていき、子どもが加法及び減法の意味を理解し、説明できるようになることを目標に据えた。そして、問題場面を絵やブロックなどを使って表し、徐々に簡単な図にも表す活動を行った。

「問題場面を図や具体物を使って表し、説明できれば、式の意味を理解できます。1年生のうちから算数の学び方を身につけることが大切だと考えます」(北西先生)

単元終了後の子どもへのアンケート結果を見ると、算数の取り組み方で「図を描いて考える」の割合が伸びていた。「ブロックを使って考える」「分からないことを人に尋ねられる」の肯定率も高く、授業改善の成果が見られた。

「調査結果を生かした授業改善では、該当学年の弱点对策をする場合と、下の学年でつまづいていた部分を上の学年で繰り返さないように手立てを講じる場合があります。この1年生の授業改善で、学年間のつながりを見ることが大切だと、改めて認識しました」(鈴木校長)

\*学習を始めるにあたって、基礎条件となる一定の知識・技能などを測るテストのこと。

図3 「YLP 前期対策 反省・評価シート」

YLP 前期対策 反省・評価シート (個人別)		対象	7月	9月	10月	11月
国語	1年	→ひらがなの習得を確実にさせる。(一人一人チェック) →読書を楽しむ指導をする。(文を書かせる、読書)				
	2年	→読書を習慣にして書く指導の充実。 →漢字の指導を徹底よく行う。				
	3年	→書写の指導を徹底する。 →国語文を読み込む指導をする。 →漢字にキーワードを指定した作文に臨ませる。 →学年の対する本を提案させる。				
	4年	→漢字・漢字を付けた作文を行う。 →漢字の決定的な指導に条件をつける。 →学年の対する本を提案させる。 →C・D層でも考えをもたせる機会を設ける。				
算数	1年	→算数記事を書いたり、見出しをつけたりする指導を強化させる。 →算数問題でプログラムやニュースを取り入れる。 →算数に自信を持って行う。 →算数問題にも取り組む。 →問題の読み取りが得意になるように、算数をする時間を確保する。				
	2年	→いろいろなパターンの算数の問題を解かせる。 →絵・図解・表・線分図を対応させて説明させる。 →算数立てて説明する。 →算数にこだわった指導をする。 →算数を多面的に考える力を育てる。 →得意を付けて話す指導する。 →授業のまとめ子どもたちの言葉でまとめさせる。 →算数の指導を徹底する。				
	3年	→算数のテーマを提案する。 →算数的問題を扱うよう指導する。 →計算のしかたを説明させる。 →いろいろな方法で考えさせる。 →算数に楽しさを感じさせる。 →算数の楽しさを伝える。 →算数を楽しくさせる。 →算数を楽しくさせる。 →算数の楽しさを伝える。				
英語	1年	→英語の楽しさを伝える。 →英語の楽しさを伝える。 →英語の楽しさを伝える。				
	2年	→英語の楽しさを伝える。 →英語の楽しさを伝える。 →英語の楽しさを伝える。				

国語と算数で、各学年が指導で重点を置くポイントを一覧表にした。全教員で共有し、他学年の取り組みも分かるようにしている。

3年 算数・英語・読書の進捗を把握させる。  
3年 算数・英語・読書の進捗を把握させる。  
3年 算数・英語・読書の進捗を把握させる。

国語主任の先生中心になって学年で話し合い、○・△・×印をつけてください。

いつも、いつも、忘れなさいね!

<授業改善>  
・明確な課題提示  
・計算の意味を考える、量感を身に付けるための算数的活動の充実  
・子どもたちの対話を大事にする (教師が話し過ぎない)  
・子どもの学び方の価値づけ (話し方・聞き方、説明の仕方、課題解決の道筋などをできるだけ具体的に、名前を挙げながら、ほめる)  
・学習規律の徹底

授業の開始・終了時刻を守る  
先生や友達の名を最後まで聞く  
友達に向かって話す  
授業スタイルの統一

<授業を見合う (学年主任を中心に若手教員を育成する)>  
・理科ダウンロードプリントの活用  
・週末の「書くこと」の宿題の徹底

<家庭との連携>  
自学の充実 ※夏休みの研修で話し合うので、それを基に指導する  
習慣の見届け・早寝早起きの習慣づけ  
※本読みカード・学年便りで呼びかける。

チェックリスト	7月	9月	10月	11月
理科ダウンロードプリント活用				
週末「書くこと」の宿題				
早寝・早寝早起き習慣づけ				

★学年主任の先生は、月末に学年会で話し合いもってください。各学年の「YLP 前期対策 反省・評価シート」を進め、お集まりで提出をお願いします。

\*住吉小学校提供資料をそのまま掲載

### 学力層別の分析で 個に寄り添った指導を行う

習熟度別授業や補充学習でも、吉田町学力調査の結果を生かしている。

同校の3～6年生の算数では、単元によって3クラスをA～Dの4コースに分けて習熟度別授業を行っているが、各コースの子どもの課題を把握した上で、各コースの学習課題、学習問題を設定している。例えば、Cコースを「既習事項の定着が不十分」と分析した場合、目標を「自分たちできまりを見つれたり、まとめたりすることを通して楽しさや手応えを感じられること」とし、授業を行うといった具合だ。

「少人数で指導したからといって、学力が上がるとは限りません。学力上位層であっても弱点はあります。それを浮き彫りにして、対応していくことが、確かな学力を育むことにつながると思います」(北西先生)

ただ、学力下位層を底上げするの

は容易ではない。公式を徹底的に指導すべきか、それとも思考力を育てるために上位層の子どもと一緒に指導した方がよいのか、様々な側面から考えてコース分けをしているという。

放課後学習やサマースクールなどでは、指導の担当者が担任から情報を得て、学力下位層の子どもに手厚い指導ができるようにしている。

「宿題を1人でできない子どももいますから、まずは学習習慣をつける第一歩という意味で、授業外の学習は重要な場です。プリントを使いながら、少人数制できめ細かく児童を見ています。学力が上がれば学習意欲も上がり、自己肯定感も高まるはず。学力だけでなく、心も育てられるような学校にしていきたいと考えています」(鈴木校長)

さらに、吉田町学力調査では、一人ひとりに帳票が返されるので、それを基に保護者と個別に面談し、弱点は何か、どのような家庭学習が必要かを説明している。そして、復習プ

リントも渡して、家庭で取り組むよう促し、家庭学習にもつなげている。

### 施策を確実にを行うための チェックシートを作成

それらの授業改善を確実にに行えるよう、2016年度は「YLP前期対策反省・評価シート」(図3)を作成した。表面は、分析結果を基に話し合った強化すべき点を、学年・教科ごとに一覧表にし、実際に実行できているかをチェックする機能を持たせている。裏面は、常に忘れないようにと、授業改善や家庭との連携で重要となるポイントをまとめた。

「これまで、実践は各先生方に任せていましたが、取り組みのPDCAサイクルを確実に回していくためにシートを作成しました」(北西先生)

子どものアンケートでは、「授業の内容がよく分かる」が85.4%、「授業が楽しい」が90.7% (いずれも2015年度) と、前年度より10ポイント以上増え、吉田町学力調査の正答率も全学年で徐々に上がっている。

「YLP3年目となり、先生方にデータを見る目が培われ、単元や学年の関連性なども踏まえた授業改善が進んでいます。今後も、子どもが満足感を持ち、手応えの感じられる授業を行うことで、学力向上を図っていききたいと思います」(鈴木校長)



**校長**  
**鈴木寿夫**  
すずき・としお  
モットーは「学校・家庭・地域が連携し、子どもに学習と生活の基礎と主体性を身につけさせたい」



**教諭**  
**北西泉美**  
きたにし・いづみ  
研修主任、YLP担当。モットーは「校内研修とYLPをつなぐことで、子どもに確かな学力を育みたい」